分一覧表は，本書の利用者に多大の便益を提供している．

なお，追録として，最近使用されている薬用植物やハーブの写真集が加えられた．新訂版においては，旧版に比べ，以上のような種々の改良がみられているが，本書の価値を一層高めるためには，生薬早見検索表のメークアップを改善し，写真の色彩をより自然色に近いものにするとか，縮尺を入れて実際の大きさを対比し易くするなど，学術書としては，なお一工夫が望まれる． （柴田承二）

□ロイ・ヴィカリー（著），奥本裕昭（訳）：**イギリス植物民俗事典**．2001． ¥7,800（税別）．八坂書房．

本書は，Oxford University Press から1995年に出版された，Roy Vickery: A Dictionary of Plant-Lore の翻訳である．著者のヴィカリーはロンドン自然史博物館顕花植物部門に勤務し，標本の出入れや貸出し等の業務を担っている．同部門を訪れた人は痩型長身で忙しく働くヴィカリーのことを思い出すに違いない．

ヴィカリーはこうした仕事の一方で，植物の民俗学についての研究を精力的に行ってきた．その成果としてこれまでに，単行本として Holy Thorn of Glastonbury（1979年），Unlucky Plants（1985年）を著し，民俗学の専門誌である Folklore 誌上にも *Lemna minor* and Jenny Greenteet 等の論文を発表している．

著者は多数の個人や機関に植物についての民間伝承等に関する情報提供を呼びかけてきた．本書はその成果であり，その目的をイギリス諸島の植物に関する民間伝承と，その伝統的な利用法－植物民俗学－についての信頼のおける情報源を提供することにあるとしている．収載された情報は一般的な民間信仰，伝統的な習慣の中での利用法，民間療法の中での利用法，その他の利用法，特定の個体に関する事例であり，各項目での記述は概ねこの順に従っている．

各項目（植物の場合は種であることもあれば複数の種であったり，属の場合等もある．植物以外では例えば漂着植物とか「のどの渇き」など）では，著者による注釈的な記述を伴うこともあるが，主体は出典が明記される収集された情報の記述である．従来のこの種の資料集にありがちであった信頼性の欠如に出典を明記することで解消を図ったといってよい．これは日本でのこの分野の出版でも学ぶべき重要な点であろう．

本書の序論として纏められた，「イギリス諸島における植物民間伝承の研究小史」は，民間伝承の研究史として手ごたえを覚える一方で，イギリス諸島における植物の研究あるいは地方植物研究の特色をも垣い間みることができ，植物学徒にも興味深いものである．民俗学と植物学の両方に深い造詣をもつヴィカリーなればこそのものである．

私は本書の原著は見ていないが，翻訳に当たっては，植物自体については無論，古英語，方言，俗語，ゲール語，ラテン語などの諸語へ理解，イギリス諸島の歴史・文化全般への深い造詣が欠かせない．これは実にたいへんなことであったことだろう．項目索引が植物の学名と和名，一般項目と3つあり，事典として機能を高めている．訳者の労ならびに出版不況が云われる中，このような貴重書を出版された八坂書房の見識に謝意を表したい．

（大場秀章）

□植物地理・分類研究会：**各都道府県別の植物自然史研究の現状**．植物地理・分類研究 **50** (2): 143–262. 2002.

北陸の植物が発行されて50周年の記念号が出版された．当初からこの雑誌の出版の中心となった里見信生氏が2002年6月2日に亡くなられたため，前半は里見氏の追悼号に当てられている．後半は50年記念の企画として，都道府県ごとの植物自然史研究の現状を展望するものとなっている．植物誌，研究機関，標本庫，レッドデータブック，植物群落の見出しの下に，すべての都道府県から執筆者の寄稿を求めたものである．こうして一覧できるようになると，各地の現状がよくわかる．一度も植物誌が出版されていないところ（東京都）があったり，標本庫が確保されていなかったり機能していていない県（これは結構多い）があったり，自然ブームの中で基盤整備が国として立ち遅れている現状が記録されている．反面，レッドデータブックは刊行済みかここ数年内の予定がすべて立てられていて，順序が逆だったらよかったのにと思わせ